An impress Group Company

各　位

2024 年 10 月 16 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

「毎年来るツバメは同じツバメか」「スズメの数が減っている」など 100 年続いた調査からわかる鳥たちの生態を、日本で唯一の鳥の研究所、山階鳥類研究所が解説！ 『足環をつけた鳥が教えてくれること』刊行

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『足環をつけた鳥が教えてくれること』（著・公益財団法人山階鳥類研究所）を刊行しました。

本書では、「小鳥も案外長生きする」「東京と福岡のユリカモメがどこか違う」「干潟の鳥シギ・チドリ類に未来はあるか？」など 100 年にわたる「鳥類標識調査」によって、明らかになってきた鳥の興味深い生態を紹介しています。

鳥類標識調査とは、鳥に足環などの標識をつけて放す調査で、渡り鳥がどこから来てどこへ行くのか、鳥が何年生きるのか、身近な鳥の数が減っているなど、鳥について様々なことがわかります。この本では、日本で唯一の鳥類研究所である山階鳥類研究所の研究員が、鳥類標識調査からわかった鳥たちの生態を解説しました。

「はじめに ～私たちは、鳥のことを、どこまで知っているのだろう～」では、絵本作家・鈴木まもるさんの描き下ろしイラストとともに、鳥類標識調査とは何か、どんなふうにして鳥に標識をつけるかなどを、カラーページで解説しています。

はじめに

私たちは、鳥のことを、どこまで知っているのだろう

春、暖かくなると、街なかを
ツバメが飛び回るようになります。
近所の池では、カモの群れがいつの間にか
姿を消していることに気づく人もいるでしょう。
反対に秋になるとツバメは見かけなくなるし、
カモはまた池に戻ってきます。

季節が変わると、
それまでいなかった鳥が現れたり、
それまでいた鳥がいなくなったりする。
これはいったいなぜなのでしょうか。

私たちは、ツバメやカモが「渡り鳥」であり、
季節によって生息場所を変えることを、

知識としてなんとなく知っています。
しかし、そういった知識のなかった昔の人にとって、
この現象はとても不思議なものでした。
そのため、鳥がいなくなるのは別の種に変身するからだとか、
泥の中で眠るからだとか、月に行ってしまうからだとか、
いろんな想像を膨らませていたそうです。
現代の私たちからすれば的外れな妄想にも思えますが、
でもちょっと考えてみましょう。私たちは渡り鳥について、
昔の人よりも知っているといえるでしょうか。

たとえば、どこの国のどこの地域に行くのか。
どんな経路を、どのくらいの時間をかけて移動するのか。
渡りの途中や渡った先で、どんな生活をしているのか。

こう考えると、「渡り鳥」についての私たちの知識は、
いまだ表層をなぞっているだけで、
それほど深まってはいないのかもしれません。

おしえて! 鳥類標識調査

鳥類標識調査では、鳥を「捕まえて」
「標識(目印)をつけて」「放す」ことを繰り返します。

Q どんな目印をつけるのですか?

A. 足環と呼ばれる、番号のついた金属製のわっかを足につけます。

主要な標識は金属足環です。鳥の足の太さは種によって異なるので、たくさんのサイズが用意されています。またそれ以外にも、プラスチック製のカラーリング(足環や首環)やカラーフラッグ(旗)をつけたり、さらにウイングタグと呼ばれる器具を翼につけたり、調査の目的によっては発信器をつけることもあります。

episode 1

鳥の「渡り」ってなんだろう

「渡り鳥」という言葉を知らない人はいないでしょう。文字どおり、渡りをする鳥のことです。では「渡り」とはなんでしょうか。渡りとは、生き物が季節によってすむ場所を周期的に変える行動のことです。それほど難しいことでもありませんが、じつは一口に鳥の渡りといってもいろいろなパターンがあります。

たとえば、街なかで子育てしているのをよく見かけるツバメは代表的な渡り鳥ですが、この鳥は春に日本にやってきて、秋になると去っていきます。ツバメのように春から秋の間、日本で子育てする渡り鳥のことを「夏鳥」と呼びます。秋になって渡っていく先は、標識調査によって東南アジア方面であることが明らかになっています（38ページ参照）。河川敷などのヨシ原で「ギョギョシ、ギョギョシ」と大きな声で鳴くオオヨシキリや、「ツキ・ヒ・ホシ（月・日・星）・ホイホイホイ」と鳴いているように聞こえることからその名がついたサンコウチョウ（漢字で「三光鳥」と書きます）なども、ツバメと同様、夏鳥です。

反対に、秋に日本にやってきて、春になると去っていく渡り鳥もいて、これらは「冬鳥」と呼ばれます。池に浮かんでいるほとんどのカモ類は冬鳥ですし、冬の使者と呼ばれるガン類やハクチョウ類もそうです。公園などの地面でよく見られるツグミや、家の周りにもいるジョウビタキなども冬鳥です。これらの鳥は、北の地方で子育てをしたのち、より暖かい場所を求めて日本にやってきます。ガン類の渡りについては、標識とともに追跡機器をつけた研究が近年精力的に行われており、新たな知見が着々と得られつつあります（64ページ参照）。

1-1
奄美大島のウグイス。この島ではウグイスは繁殖していないが、冬になると渡ってくる。この小さな体でどこから渡ってきたのだろうか

さて、右にあげた夏鳥や冬鳥は、日本で見られる個体のすべてが同じ渡りの習性を示しますが、鳥のなかにはそうでない種もいます。たとえばウグイスは、本州では「留鳥」、つまり渡りをしない種とされていますが、実際には山地から平地へと移動する個体もいます（このような鳥を「漂鳥」と呼ぶこともあります）。また沖縄の島々では、冬になると、夏に繁殖しているウグイスとは別の亜種（同一種内で分布域が異なり、形態なども少し異なるグループ）が渡ってきます（1-1）。これは標識調査によっても確認されています（1-2）。つまりそのような島々では、冬の間、２つの亜種が同所的に生息しているのです。同じ場所で同じように「ウグイス」と呼ばれている鳥のなかに、留鳥、漂鳥、渡り鳥の習性をもつ個体が混在しているということです。

また、同じ種でも地域によって渡りの習性が異なっているものもいます。身近な鳥であるホオジロは本州では留鳥ですが北海道では夏鳥ですし、南西諸島にいるアカヒゲは、鹿児島県の奄美群島では留鳥ですが、それより北のトカラ列島では夏鳥であることが知られています。なお、トカラ列島で繁殖した個体が沖縄県八重山諸島の与那国島で越冬していたことも、標識調査からわかっています（関 2018）。

さらには、同じ種で同じ場所にすんでいても、一部だけが渡りをするという奇妙な習性をもつものもいます。奄美群島で繁殖するアマミヤマシギという鳥は、これらの島々で一年中見られる留鳥ですが、一部の個体が沖縄諸島まで渡っていることがわかっています。このように個体群の一部のみが渡りをすることを「部分的渡り」と呼びますが、アマミヤマシギがなぜ部分的渡りを行うのかはまだわかっておらず、研究

episode 15

アマミヤマシギの奇妙な生活

アマミヤマシギは奇妙な鳥です。多くの鳥は昼間に活動しますが、この鳥は昼も夜も活動します。水辺にいることが多いシギの仲間なのに、水辺から離れた森の中にすんでいます。空は確かに飛べるのですが、でもあまり飛びたがりません。人間がゆっくり近づくと、飛ぶよりもまず歩いて逃げていきます。もっと近づくとしかたなく飛び立ちますが、頭上の木の枝にぶつかったり、向かい風のなか一生懸命飛んでいるのに後ろ向きに流されたり。間が抜けているというか不器用というか、ともかくそんな奇妙で愛すべき鳥です。

アマミヤマシギはその名が示すとおり奄美群島を含む琉球列島だけにすんでいる、いわゆる固有種です。アマミヤマシギの不器用さは、キツネやイタチといった捕食性の哺乳類がもともといなかった琉球列島で生きてきたことが関係しているのでしょう。のんびりしていてもさほど困らなかったため、敵をおそれてびくびくするようなことがなくなったのだと考えられます。

しかし、その性格は環境が変わると仇になります。１９７９年に、アマミヤマシギの主要な生息地である奄美大島で、毒ヘビのハブを退治する目的で人間がマングースを放してしまいました。外来種であるマングースは危険なハブなど食べずにのんびりした島の生き物を捕食し、アマミヤマシギを含むさまざまな生き物が絶滅危惧種となってしまいました。そこで、環境省はアマミヤマシギの保全事業を計画し、その事業の一環として、地元のＮＰＯ法人奄美野鳥の会が２００２年から標識調査を含むモニタリングを開始しました。標識調査によってこの鳥の年齢や生息範囲を調べ、その

15-1
夜に林道上に出てきたアマミヤマシギ

情報を保全策に活かそうというのです（Torikai et al. 2025）。

調査の方法はいたって簡単です。アマミヤマシギは夜になると林道上に立っていることが多いため（15-1）、それを探して自動車でゆっくりと走るのです。見つけたアマミヤマシギは、巨大なたも網を使って捕獲します。驚くべきことに、この鳥はたも網を持って静かに近づき、それをおもむろに被せることで容易に捕まえることができるのです。

２００２年から２０１８年までの間に、そうやって７０４羽のアマミヤマシギを捕まえました。捕まえた個体には、金属足環とプラスチック製のカラーリングをつけて放します（15-2）。こうして個体識別されたアマミヤマシギが、別のとき別の場所

■内容

はじめに　～私たちは、鳥のことを、どこまで知っているのだろう～
鳥類標識調査100周年に寄せて

1章　渡り鳥が世界をつなぐ
鳥の渡りってなんだろう／鳥の長距離移動チャンピオン／東京と福岡のユリカモメがどこか違う／ツバメの越冬地を求めて／ベニアジサシの越冬地の発見／アジサシ類は天気を呼んで渡る？／先端技術と標識調査／日本にいるハマシギは、どこからやって来るのか／足環で判明したツル類の生態／渡り鳥がつなぐ国際協力の輪

2 章　鳥はどれくらい生きる？
毎年来るツバメは同じツバメか／長生きする鳥たち／小鳥も案外長生きする／蕪島に集まる 3 万羽のウミネコ／アマミヤマシギの奇妙な生活／絶滅の可能性を評価する

3 章　鳥たちにせまる危機
激減するカシラダカに何が起きている？／スズメの数が減っている／干潟の鳥シギ・チドリ類に未来はあるか？／温暖化で変わる？ 鳥たちの渡り／トキの野外個体群を追う／じつは 2 種だったアホウドリ／鳥類標識調査が生息地保全に貢献

4 章　標識調査でわかる、あんなことこんなこと
雄か雌か？　成鳥か幼鳥か？　～性別や年齢と、標識調査～／多くの情報を秘めた足環つきの収蔵標本／ヤンバルクイナの発見／隠蔽種の存在を明らかにする／「そこにどんな鳥がいるか」を知るためには／人獣共通感染症と渡り鳥

鳥類標識調査について
鳥類標識調査 100 年の歴史／世界各国の鳥類標識調査／日本の鳥類標識調査／標識調査にかかわる法律の話／バンダーになるには／標識のついた鳥が発見されたとき

コラム
「幸福な王子」が教えてくれること／山岳バンディング／皇居の鳥たち／足環の回収記録が生き別れた親子をつないだ物語／鳥類標識調査への批判に応える／日本鳥類標識協会とは／標識調査と山階鳥類研究所

【著者プロフィール】
公益財団法人　山階鳥類研究所
鳥類の研究、鳥類学の普及啓発活動を行う公益財団法人。千葉県我孫子市にあり、約 8 万点の鳥類の標本や、約 7 万点の図書・資料を擁し、日本の鳥類学の拠点として基礎的な調査・研究を行っている。また、研究論文を掲載する学術雑誌や研究活動をわかりやすく紹介するニュースレターの発行、 所員による講演会なども行う。昭和 7 (1932)年に山階芳麿博士が私財を投じて東京都渋谷区南平台にある山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身。1986 年から秋篠宮殿下が総裁を務める。

【商品仕様】
書名：足環をつけた鳥が教えてくれること
著者：公益財団法人　山階鳥類研究所
定価：1980 円（本体 1800 円＋税 10%）
発売日：2024 年 10 月 16 日
仕様：　A5 判　192 ページ
https://www.yamakei.co.jp/products/2824230190.html

【山と溪谷社】　https://www.yamakei.co.jp/
1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。
さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社　担当：手塚
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　 E-mail：info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/